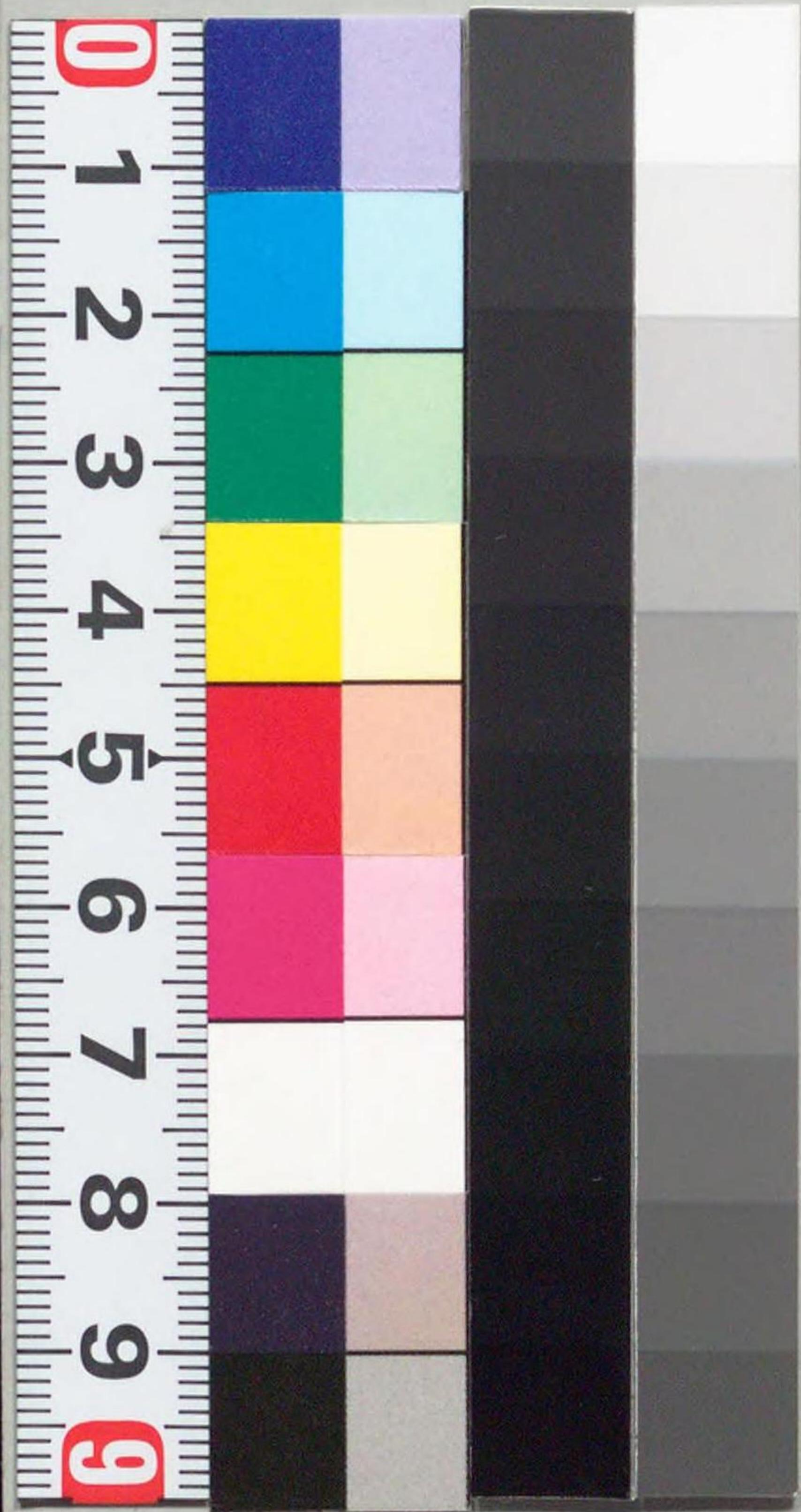


911.168
Sa266t2
(2)



00213357



9
S



齋藤茂吉著

〔アララギ叢書第百四十一篇〕

歌集
ともしび

岩波書店刊行

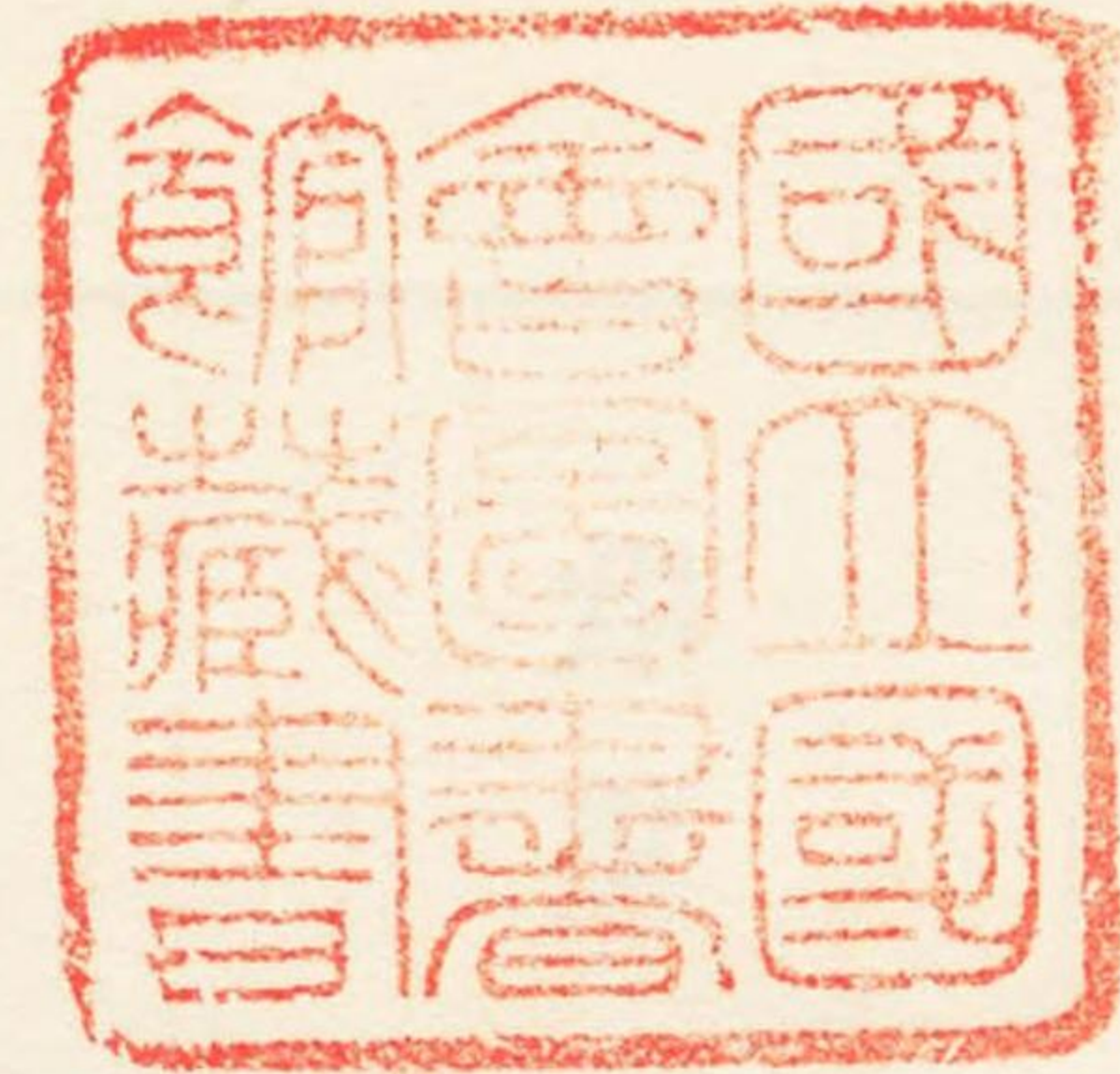
911.168 Sa266t2(2)

1

大正十四年

目次

歸國 (八首)	三
火難 (五首)	六
燒あと (五首)	八
隨緣近作 (二十九首)	一〇
長崎往反 (十一首)	三三
近江蓮華寺行 其一 (六首)	三七
近江蓮華寺行 其二 (六首)	三九



3
8
J
9



213357

醒が井途上 (六首) 三
摺針越抄 (四首) 三
閉居吟 其一 (十一首) 三
閉居吟 其二 (九首) 四〇
逢坂山 (十首) 四〇
沙羅雙樹花 (十首) 四七
木曾福島 (七首) 五〇
木曾山中 其一 (十五首) 五三
木曾鞍馬溪 (十首) 五五
木曾山中 其二 (七首) 五三
木曾氷が瀬 其一 (十一首) 六五
木曾氷が瀬 其二 (十七首) 六九

木曾氷が瀬 其三 (十七首) 七五
閉居吟 其三 (十三首) 八一
比叡山安居會 (十首) 八六
高野山 其一 (十四首) 九〇
高野山 其二 (十首) 九五
熊野越 其一 (二十首) 九
熊野越 其二 (十首) 一〇六
箱根漫吟の中 其一 (十首) 一〇
箱根漫吟の中 其二 (二十三首) 一四
箱根漫吟の中 其三 (十首) 一三
草蜉蝣 (十首) 一六
渾 沌 (二十一首) 一三

雑歌控 (三首) 180

昭和元年

家常茶飯 (五首) 145
 雪ぐもり (四首) 147
 寒月集 (十一首) 149
 山房の夜中 (五首) 153
 山房漫吟其他 (二十六首) 155
 麥の秋 (五首) 166
 三峯山上 (五首) 170
 上野國に入る (五首) 171
 歩道の氷 (八首) 174

昭和二年

金線草 (八首) 177
 諏訪 (十三首) 180
 霜 (十四首) 185
 信濃數日 (八首) 190
 高遠 (四首) 193
 童馬漫吟 (九首) 195
 この日ごろ (五首) 199
 この夜ごろ眠りがたし (三首) 201
 奉悼歌 (八首) 204
 昭和二年歳旦頌 (三首) 209

山房小歌 (九首) 二二〇

伊東浴泉雑歌の中 (五首) 二二六

春のはだれ (五首) 二二八

菫 (五首) 二三〇

雨 (八首) 二三三

童馬山房折々 (二十二首) 二三五

永平寺吟 (三十三首) 二三六

アララギ第四回安居會 二三六

大佛寺途上 二三八

玲瓏巖 二四〇

門外・歸途 二四四

永平寺漫吟補遺 二四六

十國峠 (五首) 二四九

青山墓地 (八首) 二五一

信濃行 其一 (八首) 二五四

信濃行 其二 (八首) 二五七

信濃行 其三 (八首) 二六〇

天龍川 其一 (七首) 二六三

天龍川 其二 (十一首) 二六六

妙高温泉 其一 (五首) 二七〇

妙高温泉 其二 (八首) 二七三

晩 秋 (八首) 二七五

業餘の吟 (十六首) 二七八

この日頃 (九首) 二八三

雑歌 (六首) 二六七

昭和三年

折に觸れつつ (十一首) 二九三

近時 (五首) 二九七

淺草をりをり (五首) 二九九

この日ごろ (五首) 三〇一

折に觸れて (五首) 三〇三

青根 (五首) 三〇五

〇病棟 (五首) 三〇七

業餘小吟 (八首) 三〇九

仙臺 (五首) 三一三

三山参拜の歌 (七十七首) 三二四

志津 三二五

湯殿山 三二九

月山 三二七

羽黒 三三三

歸路 三三八

出羽三山 三四〇

最上平野を過ぐ 三四一

草むら (十一首) 三四三

歌會 (四首) 三四七

折々の歌 (十四首) 三五〇

奉祝 (二首) 三五五

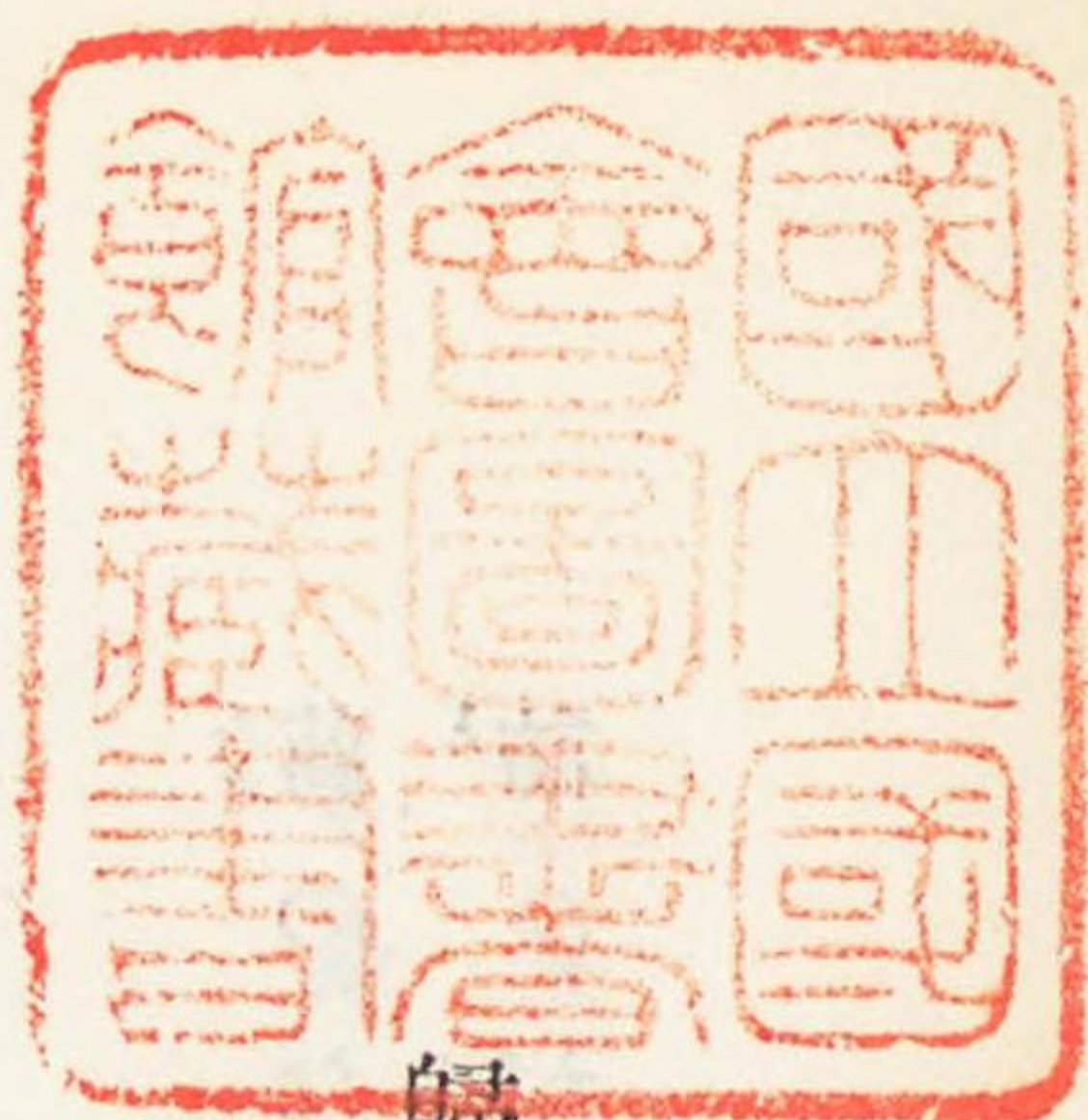
冬 (八首) 三五
 籠 喪 (十首) 三九
 雜 歌 (五首) 六三
 御大典奉祝歌 (二十一首) 六六
 後 記 七七

歌集 ともしび

大正十四年

海菜ふゆじむ

六五十四年



歸

國

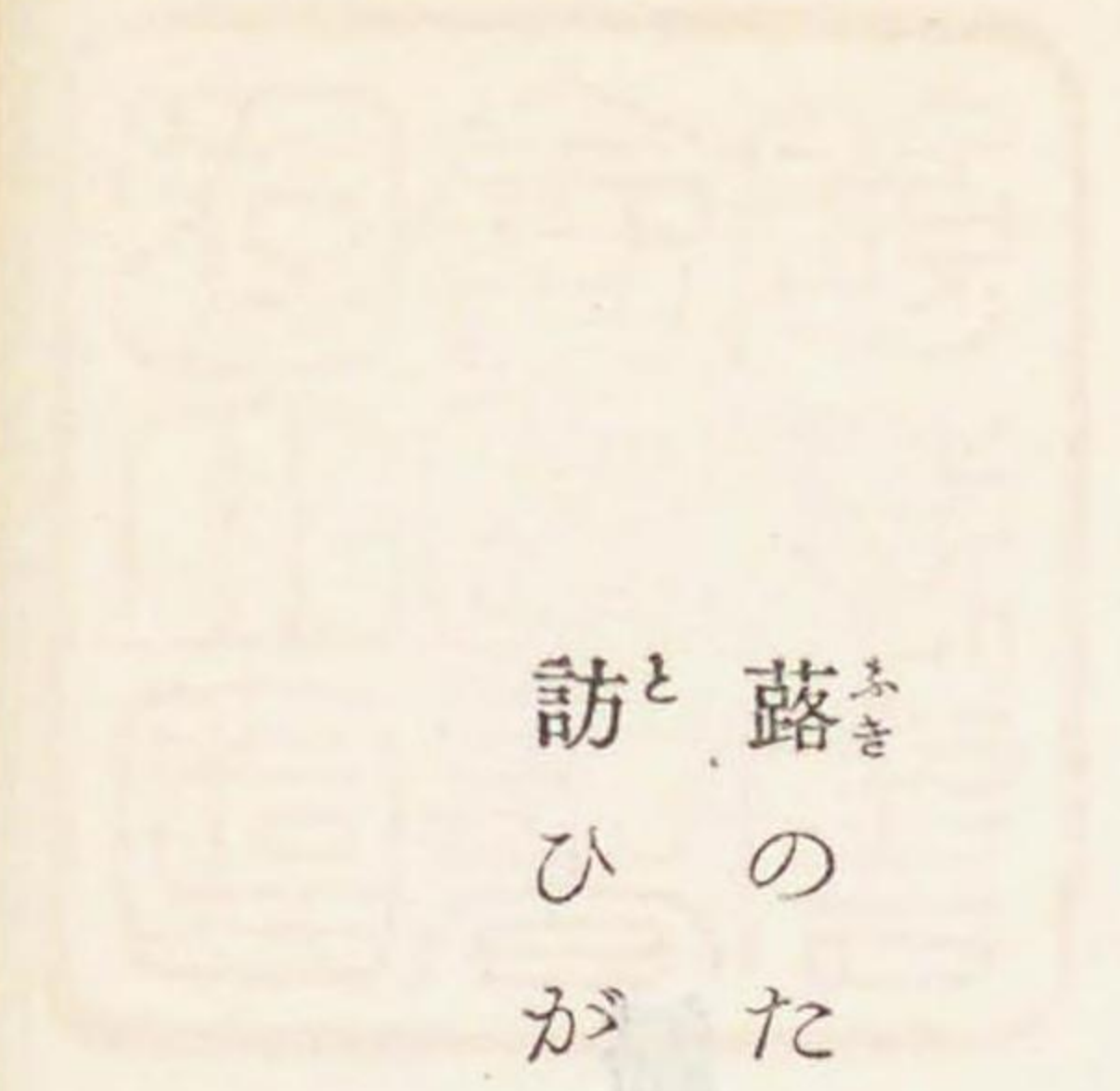
かへりこし日本ほんのくにのたかむらもあかき鳥
居もけふぞ身に沁む

ひといろに霜がれてをり日ひの光ひかりすがしくさす
を見たりけるかも

はるかなる山べのかすみ真まちかくに竹の林の
黄きなるしづかさ

比良山ひらやまは雪かかむりて居たりけり春の來き向むかふ
比良のゆふぐれ

訪とひがてぬかも
露つゆのたういまやふふまむ蓮華寺れんげじの隆應和尙りゅうおうしやうを



たまゆらに見えずなりたる天龍てんりゆうのしろき川原かはら
も身に沁みにけり

よるさむき國府津こふづの驛えきに時のまは言ことも絶えた
り友とあひ見て

チロールの山のはざまをみちびきしをとめの
ことを思ひいでつも

火難

焼けはてしわれの家居のあとどころ土の霜ば
しらいま解けむとす

かへり来てせんすべもなし東京のあらしき空氣
にわれは親しむ

とどろきてすさまじき火をものがたる穉兒の
かうべわれは撫でたり

やけのこれる家に家族があひよりにて納豆餅く
ひにけり

やけあとのまづしきいへに朝々に生きのこり
啼くにはとりのこゑ

焼あと

焼あとにわれは立ちたり日は暮れていのりも
絶えし空しさのはて

ゆふぐれはものの音もなし焼けはててくろぐ
ろと横たはるむなしさ

かへりこし家にあかつきのちやぶ臺に火燄の
香する澤庵を食む

家いでてわれは來しとき澁谷川に卵のからが
ながれ居にけり

うつしみは赤土道のべの霜ばしらくづるるを
見てうらなげくなり

隨緣近作

齋藤歸朝歡迎歌會

二月七日於清水
谷公園皆香園

きもむかふ友とあひ見むと焼あとの寒き家よ
り吾がいでて來ぬ

長塚節忌

三月七日於清水
谷公園皆香園

うつせみの我より先きに身まかりてはや十年
になりにけるかも

焼あとに湯をあみて、爪も剪りぬ

うつしみの吾がなかにあるくるしみは白ひげ
となりてあらはるるなり

白田舎即事

霜しろき土に寒竹の子はほそほそしほそ
ほそし皮をかむりて

たかむらのなかに秋田の蕨の莖ひとつは霜に
いたみけるかも

かたまりて土をやぶれる羊歯の芽の巻葉かな
しく春ゆかむとす

きさらぎなかば

焼あとに掘りだす書はうつそみの屍のごとし
わが目のもとに

くろこげになりゐる書をただに見て悔しさも
既わかざるらしき

あわただしく手にとれる金槐集は蠹くひしま
ま焼けて居りたり

歸雁

焼けあとに新しき家たちがたし遠空をむれて
かへるかりがね

ひとりこもれば何ごとにもあきらめて胡座を
かけり夜ふけにつつ

きこゆるはあはれなるこゑと吾はおもふ行春
ぞらに雁なきわたる

家居

いましがた童が居りて去りけらしあかつきの
土にこぼれたる鹽

をさなごは齒をきよむると朝々にわれより先
におきいでにけり

男のわらは咳しつ口そそぐしはぶきの音こ
こに聞こゆる

このあさけ焼跡を少しもとほりて焼けたる眼
鏡ふみつけにけり

さしあたりてただただ空し納豆を食まむとお
もふ念願こそあれ

行春のあめ

ここにもほそく萌えにし羊齒の芽の渦葉ひら
きて行春のあめ

はしけやしこの身なげきて虎杖のひいづると
きになりになるかも

きほふ心もなくなりけるかなや五月一日か
せひきて居り

よるふけて思ひだしたりうづまける羊齒のも
えこそあはれなりしか

うまれし國にかへりきたりてゆふされば葦あしを
くひたり心しづかに

かすかなる蟲のあそびも見ゆるなり日にてら
されし擬ぎ寶珠ぼうしゆの葉に

むなしきあとの宵よひやみにして蝙蝠かほほりのひらめく
を見れば二つゐるらし

やけあとに黒きいきものの蝙蝠かほほりはひくぞら飛
べりゆふやみゆゑに

湯をあみてまなこつむればうつしみの人ひとの寂まじ
しきや命いのちさびしき

わがこころしづかになりて見て居をるは油あぶらぎり
たる羊齒しだのむらだち

櫻ばな咲きのさかりをこもりゐて狂ふをみな
に物をいふなり

伊藤左千夫第十三回忌

五月三日於
龜戸普門院

師の墓ゆくに降れる雨はるこそ寂しけれ墓あめをぬらせる
行春の雨

長崎往反

ひそかなる旅のごとくにわれは來ぬ病みたる
友を診みむとおもひて

四年よとせ經とせて來こし長崎のあさあけに御堂みだうの鐘かねの鳴
りひびくおと

氣ぐるひて居りたる友を一目見しわれの心は
きはまらむとす

丸山の夜のとほりを素通りし花月のまへにわ
れは佇む

かへりちの汽車の中にても病院の復興の金を
おもひて止まず

神戸なる友に逢ひなばいくばくかの話遂げむ
とおもひて來しを

足柄の友とあひ見てのぞみ無きことをも吾は
こひねがひけれ

一等の汽車に乗りある友にあひ吾を語れば心
やや和む

その友の語りていふに「君が不幸の限度は既に
とほり越したり」

横濱にてわかるる時に洋風にわれ友の手をつ
よく握りつ

金圓のことはたはやすきことならずしをしを
として歸り來れり

近江蓮華寺行 其一

右中山道みちひだりながはま越前みちとふ石
じるしあはれ

このみ寺に仲時の軍やぶれ來て腹きりたりと
聞けばかなしも

山なかのみ寺しづかにゆふぐれて隆應上人は
病みこやりたる

あかつきも木兎みみづくなけり寺なかに隆應和尚やみ
てこやせる

茂吉もきちには何かうまきもの食はしめと言ひたま
ふ和尚のこゑを聞きこゆる

さ夜ふけていまだ寐なくに山なかを啼きゆく
木兎みみづくのこゑを聞きたり

近江蓮華寺行 其二

ひかりさす松山のべを越えしかば苔よりいづ
るみづを飲むなり

しづかなる春山はるやまなかのみ寺には夜半よなにわれら
が居たりけるかな

さ夜なかにめざむるときに物音ものおとたえわれに涙なみだ
のいづることあり

目をあきてわががたはらに臥したまふ隆應和
尙のほひかなしも

やまなかの泉いづみにひかりさし居りてわきづるみ
づは清すがしといはむ

となり間に、偏癱を得て常臥に臥せる隆應和尚も、はや眠りたま
ひつらむとおもほゆる、夜もいたくふけて、

となり間まにかすかなるものきこゆなり夜半よなに
つまぐる數珠じゆずはきこえぬ

醒が井途上

醒が井に眞日くれゆきて宵闇にみづのながれ
のおとこころよし

桑の實はいまだ青しとおもふなり息長川のみ
なかみにして

近江路の夏もまだきの小草には一つ螢ぞしづ
かなりける

やまがひのそらにひびきて鳴く蛙やまをめぐ
ればすでにかそけし

たぎちくるながれの岸におりこしが顔をあら
へり目金はづして

ゆふまぐれ息長川をわたりつつかじかのこゑ
の徹るをききぬ

摺針越抄

かぎろひの春山ごえの道のべに赤がへるひと
つかくろひにけれ

木の間がくり湧きでしみづはおのづからここ
の坂路にながれ來たりし

近江路の夏の來むかふ山もとにひとりぞ來つ
る漆を摘みに

番場いでて摺針越をとめくればいまこそ萌ゆ
れ合歡の若葉は

閉居吟 其一

なにがなし心おそれて居たりけり雨にしめれる
 疊のうへに

烟草をやめてよりもはや六年むとせになりぬらむ或
 る折をりはかくおもふことあり

言ことにいでて強く悔いむとはおもはねどさびし
 き心いやたへがたし

Minchenミンチンヘンにわが居りしとき夜よるふけて陰ほとの白毛しらげを
 切りて棄てにき

梅賣うめうりのこゑの清すがしさやわが身にははや衰おとろふる
 けはひがするに

ただ一つ生きのこり居る牡雞せんとりに牝雞めんどりひとつ買
ひしさびしさ

庭すみに竈かまどつくれり焼辭書やけじしょも焼人形やけにんぎやうも燃やし
てしまへ

さ夜ふけゆきて朱硯しゆすやうに蚊がひとつとまりて居
るも心がなしも

さみだれて疊かさねのうへにふく黴かびを寂さびしと言はな
足に踏みつつ

午前二時ごろにてもありつらむ何か清々すがすがしき
夢を見てゐし

夜ふけてみじかきこゑを立てて鳴く鳥こそ過
ぐれ臥處ふしどに近く

閉居吟 其二

をさなごの熱いでて居る枕べにありし櫻桃おうたうを
取り去らしめし

さみだれも晴間はれまといへば焼けし書ふみつらなめ干
せりあはれがりつつ

窓したを兵幾隊も過ぐるなり足竝あしならの音をしま
し聞き居り

わがこころ呆ぼけしごとしと人みるらむか雷らいこ
そ鳴れ玻璃はり窓どひびきて

あつぐるしき日にこもりつつ居たりけり黒き
ダリアの花も身に沁む

四五日まへに買ひてあたへし牝雞めんどりが居なくな
れりといふこゑのすも

焼あとに迫りしげれる草むらにきのふもけふ
も雨は降りつつ

だれたる書ふみをいぢれり
Thantosタナトスといふ文字見つけむと今日けふ一日ひとひ焼けた

今日けふの日ひも夕ぐれざまとおもふとき首かみをたれ
て我は居りにき

逢坂山

春逝はるきし逢坂山の白き路みちきのふもけふもひた
に乾ける

ひるがへる萌黄わか葉や逝春のひかりかなし
 き逢坂を越ゆ

砂けむりあがるを見つつ午すぎし逢坂山をく
 だり來にけり

逢坂をわが越えくれば笹の葉も虎杖もしろく
 塵かむり居り

あふさかの關の清水ははしり出の水さへもな
 し砂ぞかわける

逢坂の山のふもとに地卵を賣るとふ家も年ふ
 りて居り

その家に雞の糞をも賣るといふ張紙ありてう
 らさびしかり

蟬丸せみまるの社やしろにたどりつきしとき新聞紙しんぶんしをば敷き
てやすらふ

春ふけし逢坂山ののぼりぐち生おふるあらくさ
に塵ちりかかりけり

逢坂山の道のべにながれけむ砂のかわけるを
吾は踏みける

沙羅雙樹花

いにしへも今のうつつも悲しくて沙羅雙樹さらじゆの
はな散りにけるかも

あかつきに咲きそめたるがゆふぐれてはや散
りがたの沙羅雙樹の花

いとまなき現身うつしみなれどゆふぐれて沙羅雙樹の
花を見にぞわが來し

白たへの沙羅さらの木この花はなくもり日のしづかなる
庭に散りしきにけり

命いのちをはりて穉せきなき兒こらもうづまりしみ寺の庭の
沙羅雙樹のはな

白妙しろたへの淡き花こそ散りにけれいまだ丈たけひくき
沙羅の木のもと

くるしみにこらふる人もおのづから沙羅の木
のもとに來りけるかも

ゆふぐれのをぐらき土つちにほのかにて沙羅の木
の花散りもこそすれ

あはれなる花を見むとて來りけり一もと立て
る沙羅雙樹の花

うつそみの人のいのちのかなしとぞ沙羅の木
の花ちりにけるかも

木曾福島

あが心かたじけなさに木曾がはの鳴瀬なるせ聞きつ
つ二夜寝にけり

こころ細りしにやあらむ山にして漆の芽さへ
かなしきものを

聞鳥きみどりの佛法僧鳥の呼ぶこゑをまなこつむりて
我は聞きたり

木曾の夜くだちに佛法僧といふさびしき鳥を
聞きそめにけり

山のべにかすかに咲ける木苺の花に現身の指
はさやらふ

くれなるの炎にもゆる山火事の話しながら木
曾谷ゆけり

樹の根がたの土にこもれる蟻地獄あはれ幽け
しところおもひしか

木曾山中其一

あはれとぞ聲をあげたる雪照りて茂山のひま
に見えしたまゆら

満ちわたる夏のひかりとなりにけり木曾路の
山に雲ぞひそめる

おくやまの岩垣ぶちを小舟にて人ぞ渡らふ木
曾路かなしも

かなしかる願をもちて人あゆむ黒澤口の道の
ほそさよ

ここにきて雪をかかむる奥山はおりゐしづめ
る雲のかげなる

くろずめる山は幾重もたたなはり見えがくれ
する山ぞ戀しき

しげ山の日かげるうへにあらはれし雪はだら
なる山は何やま

赤彦はわれに語らふ昨の夜は燕嶽の夢みて居
たりとふ

あまねくもわたらふ夏とたたなはる茂山のか
げに雲しづむ見ゆ

旅を來て王瀧川のさざれには馬の遊ぶをわが
見つつをり

奥木曾へ汽車こそ走れ御嶽の雪のかがやきを
もろともに見つ

あしびきの山澤びとの家居よりをさなごひと
り出でて來れり

樵樹のしげき樹の間を通り來てこころ明るし
羊齒のむらだち

山がはの鳴瀬なるとせに近くかすかなる胡こ頹たい子この花こ
そ咲きてこぼるれ

木曾谷は行くべかりけりふかぶかと山やま肌はだくろ
くなりけるかも

木曾鞍馬溪

こもり波あをきがうへにうたかたの消えがて
にして行くはさびしる

ふかぶかと青ざるみづにいつしかも雨の降り
居るはあはれなるかも

鶺鴒せきりのあそべる見れば岩淵いわふちにほしいままにし
て隠かくろふもあり

岩のまのみづのこもりに細き雨ふりて波よる
 ときのまを見し

青淵に蛙ひとつがいつこゆかぼたりと落ちて
 しづごころなし

おく山の淵に來しかば水のへに浮きてたゆた
 ふ水沫を見たり

頬白は淵のそがひの春の樹の秀はにうち羽はぶり
 啼きたるらしも

青淵に石おち入りしときのままのとどろく水を
 なぐさみがたし

山がはのあふれみなぎる音にこそかなしき音おと
 は聞くべかりけれ

こもり淵たたへがうへの岩の秀に赤蜂あかばちの巢は
 かかりけるかも

木曾山中 其二

やまがひのすでに黝くろすむしげり生ふに枯れし木
 立を見すぐしかねつ

しげ山に枯れし木群は雷いかづちのひびきて落ちしあ
 とと云ふはや

夏山のしげりがおくに一ところ枯れ果て居る
 をわれは目守まもりれり

奥木曾のかぐろくしげる山なかに枯れし木群
 を見ればかなしも

繁山しげやまのしげりのなかに枯れたるは雷いかづちの火ひに枯
れしとを聞け

毒どくぐさの黄いろき花を摘みしときその花恐れ
よといへば棄てつる

山田居やまたゐに今はくもり鳴く蛙ゆふさりくれば
多く鳴くらむ

木曾氷が瀬 其一

やまこえし細谷川に棲むといふ魚を食ふらむ
旅のやどりに

ふかやまのはざまの陰におちたまり栗のいが
こそあはれなりけれ

栗のいが谷まのそこにおち居れば夏さりくれ
 どしめりぬるかも

羚羊がもしかの皮の腰皮さげながら木曾の山びと山く
 だる見ゆ

のほりゆく谷水のうへを蝶ひとつ飛べるもさ
 びし山は遂たがくて

峽間路はざまちをとほく入りしか山かげに焚火たきびのあと
 がありにけるかも

黒くなりて焚火せるあとの残れるをしばし見
 てゐしが我は急げり

人戀ひて來しとおもふなあかねさす真日まひくれ
 てより山がはのおと

櫟くわい若葉わがはひねもす風かぜにうごきたる山のゆふぐれ
人怒り居り

山路來て通草あけびの花のくろぐろとかなしきもの
をなどか我がせむ

初夏の山の夜にして湯ゆに沾ひでし太き蕨わづらも食をし
にけるかも

木曾氷が瀬 其二

細谷のすがしきみづに魚うろこづの命とりたりと思ひ
つつ寝し

山水やまみづにねもごろあそび居りぬらむ魚のいのち
を死しなしめにけり

慈悲心鳥ひとつ啼くゆゑ起きいでてあはれと
ぞおもふその啼くこゑを

あかねさす晝のひかりに啼かぬ鳥慈悲心鳥を
山なかに聞け

木曾山に夜は更けつつ湯を浴むと木の香身に
沁む湯あみ處に居し

さ夜ふけて慈悲心鳥のこゑ聞けば光にむかふ
こゑならなくに

啼くこゑはみじかけれどもひとむきに迫るが
ごとし十一鳥のこゑ

二こゑに呼ばふ鳥がね聞こえつつ川の鳴瀬の
耳に入り來る

ぬばたまの夜の山よりひびきくる慈悲心鳥を
めざめて聞かな

まちかくの山より一夜ひとよきこえ來し慈悲心鳥は
山うつりせず

ほがらかにこゑは啼なかねど十一じふいち鳥のおもひつ
めたるこゑのかなしさ

夜半よなに起きて聞きつつ居れば十一鳥は川の向
うの一處ひととこに啼く

なくこゑの稍ちよにけどほくなりたるは山移やまうつりして
啼くにやあらむ

木曾やまの春くれゆきし木末こぬれには闇くらに戀こほしき
鳥鳴きにけり

夜^よふけて慈悲心鳥の啼く聞けばまどかに足ら
ふ心ともなし

あはれなるこゑに啼きつつ木曾山の慈悲心鳥
はあかつきも啼く

夜ふけし山かげにして啼くらしき佛法僧鳥の
こゑのかそけさ

木曾氷が瀬 其三

すがすがし籬のながれに生^{うま}れたる魚^{いさな}をとりて
食ふあはれさよ

おきながさ小^{ちひさ}き見れば木曾山に染^しみ入るひか
り寒しとおもふ

白頭翁^{おきなぐさ}ここにひともとあな哀^{かな}し蕾^{つぼみ}ぞ見ゆる山
のべにして

山かげのながれのみづを塞^せきとどめ今ぞ魚^{うを}と
る汗かきながら

魚とると細谷川のほそみづにいさごながれて
しましにこりぬ

谷あひをながる川の水乾^ひるとさざれに潜^{ひそ}む
黒き魚あはれ

瀬と淵ともごもあれど日の光あかきところ
に魚は居なくに

塞^{せきと}止めて細きながれのにごるときはやも衰^せふ
る魚ぞ哀^{かな}しき

ほがらかにあしたの鳥の啼けるとき慈悲心鳥
はつひに啼かずも

あしびきの山よりいづるやまがはの石はあら
はに日に温み居り

石楠しやくなきは木曾奥谷ににほへどもそのくれなるを
人見つらむか

さるをがせ長きを見れば五百重なす山の峠も
越えにけらしも

たまゆらはいのち和まむやまがはに温き砂を
手につかみ居り

ひかり染む山ふかくして咲きにけり石楠の花
いはかがみのはな

白雲は直ぐ目のまへをうごきつつ夏にい向ふ
空晴るるらし

ここにして寂しき山に雨合羽かけられし馬い
ななきにけり

慈悲心鳥すでに啼かざる朝山に峠を越ゆる馬
が憩へり

閉居吟 其三

焼あとに草はしげりて蟲が音のきこゆる宵と
なりにけるかも

極樂へゆきたくなりぬ額よりしたたる汗をふ
きあへなくに

ひさびさに銀座あるきてうらわかき夜の女を
見ればすがしも

戀にこがれて死なむとすらむをとめごもここ
の通に居るにやあらむ

尋常のごとくわれはおもへり羽蟻が羽おちて
疊まよひありくを

焼死にし靈をおくるとゆふぐれてさ庭に低く
火を焚きにけり

まじろがす吾は目守れり二形になり果てたり
といへる少男を

吾つひに薯蕷汁をくひて満ち足らふ外面に雨
のしぶき降るとき

ひぐらしは墓地の森より鳴きそめてけふのゆ
ふぐれわが身にぞ沁む

ひぐらしの心がなしくひびくこゑ五年ぶりに
聞きて我が居り

かたづかぬ爲事いくつか手にもちて比叡の山
に旅だたむとす

偶像の黄昏くわんこんなどといふ語ことも今ぞかなしくおも
ほゆるかも

馬追のすがしきこゑはこのゆふべかは變りはてた
る庭より聞きこゆ

比叡山安居會

大正十四年七月二十八日より五日間、比叡山上にて第二回アララギ安居會を催す。講師、岡麓・島木赤彦・齋藤茂吉・中村憲吉・土屋文明。作歌若干を録す。

比叡山のいただきにして歌がたりわがともが
らは飽くこともなし

をりをりは光る近江のみづうみを見おろしに
けり戀しむごとく

赤き雲すぐまぢかくに棚びけり比叡山の上に
目ざめしとき

白壁のうへにさしたる入りがたのよわき光を
吾は見てゐる

わが受けし火難ののちの悲しみをこの夏山に
やははむとする

蟬のこゑ波動をなして鳴きつぐを聴けども飽
かず比叡の山に

むらぎもの心さだまりて讀みつげる萬葉びと
の歌のかなしき

うろくづの香のたえて無き食物を朝な夕なに
残すことなし

夜もすがらねむりがてなくに明けくれし吾れ
この山にあらたまりける

ある時はあわただしくも雲まよふ佛の山にそ
の雲を咏む

高野山 其一

空海のまだ若かりし像を見てわれ去りかねき
今のうつつに

あひともに疑ひながら聴く鳥のするときこる
は木の間に近し

金堂にしまし吾等は居りにけり山にとどろく
雷聞きながら

うごきぬし夜のしら雲の無くなりて高野の山
に月てりわたる

まゐり来て高野の山のくらやみに佛法僧とい
ふ鳥を聞く

はるけくも黝^{くろ}すむ山の起伏^{おきふ}のつひのはたてに
淡路島みゆ

はるばるとのぼり來りし五人^{いつたり}は雲より鳴れる
雷^{らい}を聞き居り

紀伊のくに高野^{かうや}の山のくだり路^ぢにつめたき心^{こころ}
太^たをぞ食ひにける

ひさかたの雲にとどろきし雨はれて青くおき
ふす紀伊のくに見ゆ

父こふる石童丸のあはれさも月あかき山ゆき
つつおもふ

いにしへにありし聖^{ひじり}は青山を越えゆく彌陀に
すがりましけり

みなみより音たてて來し疾きあめ大門外の砂
をながせり

たかのやま奥のながれに掛かりをる無明の橋
も吾等わたりつ

のぼりつめ來つる高野の山のへに護摩の火む
らの音ひびきけり

高野山 其二

くにぐにの城にこもりし現身も高野の山に墓
をならぶる

紀伊のくに高野の山に一日ゐて封建の代の墓
どころ見よ

いく山ごえ佛ほとけの山に砂あさきみづの流は心し
づけし

日ひ一ひと日ひみだりたりける雲たえて月あかあかと
山をてらしぬ

時のまとおもほゆるまに南みなみより大おほき雲こそ湧
きいでにけれ

佛ぶつ法ほふ僧そう鳥ちうのこと論らひ居りたりし吾らも寝いねぬ
月かたむきて

五人は岡麓、土屋文明、内藤喬、武藤善友及び予なり。

おしなべてもの常つねなき高たか山やまの杉の木立こたちに雲
かかりけり

年ふりしいまの現うつつにたかのやま魚焼く香こそ
ものさびしけれ

ひる未またき高野かうやのやまに女子をみなごと麥酒むぎざけを飲みねむ
けもよほす

紀伊のくに高野かうやの山の雨はれて嘴太はしごの鴉からめの
まへをゆく

熊野越 其一

雉子の雛おぼつかなくもかくろひぬ打ひらき
たる谷のうねりに

紀伊のくに大雲取おほぐもとりの峰ごえに一足ごとひとあしごとにわが
汗はおつ

いましめて吾等のこゆる山路は日にこがれた
る草ぞみだるる

やま越えむねがひをもちとめどなく汗はし
たたる我が額より

紀の海よりただに起れる眼下の幾山脈はうご
くがごとし

213357

谷底を暫し歩みて居りにけり嚏をぞせし後は
さぶしも

くたびれていこへるひまに脚絆よりとりし山
蛭ひとつ殺しぬ

かがなべし旅といはなくに紀の國のさびしき
山に汗をおとせり

峠路のながれがもとの午餉梅干のたねを谿間に落す

山なかのほそき流れに飯のつぶながれ行きけりかすかなるもの

この山はいよよさびしくなるらむか焚火をしたる跡さへもなし

暗谷にありし泉にかがまりて汗にぬれたる眼鏡をあらふ

夏ふげし大雲取を越えながら手拭の汗幾しぼりしつ

雲取を越えて來ぬれば山蛭の口處あはれむ三人よりつつ

218157

山つみの目に見えぬ神にまもられて吾ら夕餉
の鮎あゆくひにけり

峠より相むかひける山峽やまがひにしろき川原ははつ
かに見えつ

目のわるき遍路へんろが鳴らす鈴すずの音は一山ひとやまかげに
なりてきこえず

茶屋のあと幾つもありてのぼり來しこの山道やまみち
はいよいよ寂し

しづかなる眠ねむりよりさめ三人みたりくふ朝がれひには
味噌汁は無し

あまつ日に面おもてをこがし紀の國の山をぞ越ゆる
北にむかひて

熊野越 其二

大雲取小雲取を越え、本宮、湯峰を経て、熊野川をくだり、新宮より勝浦にいで、夜航船にて伊勢の鳥羽港に上陸せり。後、二見浦、伊勢神宮参拜。

熊野路を越えつつくれば遙かなる二山ふたやまにわた
り焼けしあとあり

峰ごえを一つをはりし谿ぞらに黒き蝶こそ飛
びをりにけれ

まさびしきものとぞ思ふたたなづく青山のま
の川原を見れば

本宮ほんぐうへ近づく道に出で居りし赤棟蛇やまかがしを吾われころ
しけり

虹のわの清けき見つつ紀伊のくに音無川をけ
ふぞわたれる

山のうへに滴る汗はうつつ世に苦しみ生きむ
わが額より

紀伊のくに大雲取を越ゆるとて二人の友にま
もられにけり

眼下に小口の宿の見ゆるころ山のくだりはわ
が足によし

くに境ふ山をやぶりにごり水あふれみなぎ
りし時を思へり

ゆふばえの雲あかあかとみだりつつ熊野の灘
は夜にわたりぬ

箱根漫吟の中 其一

大正十四年八月より九月にわたり箱根強羅にこもりしをりをりの歌を輯め録す。

しづかなる峠をのぼり來しときに月のひかり
は八谷をてらす

くまなき月の光に照らされしきびしき山をけ
ふ見つるかも
ほそほととほりて鳴ける蟲が音はわがまへ
にしてしまらくやみぬ
こほろぎは消ぬがに鳴きてゐたりけり箱根の
やまに月照れるとき

ものの音に怖おづといへどもほがらかに蟋蟀こほろぎ鳴なきぬ山の上にて

まなかひに迫りし山はさやかなる月の光に照らされにけり

山なかのあかつきはやきい温泉ゆには黒き蟋蟀こほろぎひとつおほ溺れし

見てをれば湯いづる山のひるすぎに氷こほりを負ひてのぼり來し馬

いそぎ行く馬の背なかの氷こほりよりしづくは落ちぬ夏の山路やまぢに

たまくしげ箱根の山に夜もすがら薄をてらす月のさやけさ

箱根漫吟の中 其二

さやかなる月の光に照らされて動ける雲は峰
をはなれず

この峰にきこゆる音はおもおもし湯の吹きい
づる谿のつづきか

青栗のむらがりて居る山はらに吾はしまらく
息をやすめぬ
まながひに雲はしれども遠雲は動かぬごとし
谿をうづみて

をさなごの茂太があぐるとほりごる谿を幾つ
か越えてこだます

秋ふかきおもひこそすれしかすがに夕雨はれ
て蟋蟀こほろぎきこゆ

おのづから寂しくもあるかゆふぐれて雲は大
きく谿にしづみぬ

目のまへに雉子きぎすとびたつ響動は雨のふりゐる
山なかにして

あしびきの山のたをりにころよし熟めるし
どみの香をかぎ居れば

夏山の繁みがくれを來しみづは砂地すなぢがなかに
見えなくなりつ

谷つかせいきほひ吹けば高原の薄なみよる狭
霧きりのなかに

あしびきの細き山路やまぢに湯のあふれ白くながれ
て居をりにけるかな

青山あをやまに動ける雲の寂しきをひとり雲ぐもとぞ吾は
云はむか

おのづから谷を越え來ぬ香かに立てる山のいぶ
きに吾はちかづく

わがむかふ鷹たかのす巢山やまの黒きひだ地震かゆりしより
かはりたりとふ

かがまりて吾われの見てゐるところにはたざりい
づる湯いき吹きながら

あらはなる石原いしはらのうへをあゆみ居り硫黄りゅうわうふき
たつまなこに沁みて

ほそほそと土つちに沁しみみいる蟲がねは月あかき夜
にたゆることなし

しづかなる光は夜よにかたむきておどろがうへ
の露を照らせり

山そぎて谿は深しも白波しらなみの立ちてながらふ川
原荒あらいしも

おのづから吾われの越えにし青山あそやまは谿の流までう
ねり至れる

たまくしげ箱根の山はきはまらずこの湖みづうみをよ
ろひけるかな

ひる過ぎてくもれる空そらとなりにけり馬おそふ
虻あぶは山こえて飛ぶ

箱根漫吟の中 其三

しらじらと谿の奥處おくどに砂ありて遊べる鳥は多
からなくに

をさな兒は手をひたしつつ居たりけりいさご
動きて湧きいづる湯に

葛くわの花さきぬるみればみすすかる信濃に居た
るころしおもほゆ

朝明あさけより寂しき雨は降り居りて檼まきの木立こだちに啼
く鳥もなし

山なかに一ひと夜明よけつつ味噌みそ煮ると泉いづみのみづは
われ汲こみて來こむ

水のおと谿の底よりきこゆるはたまさかにし
て近くなりつつ

秋づけるこの山なかに雨ふりて蟋蟀のこゑ一
夜きこえず

かすかなるものにもあるかうつせみの我が足
元に痰なむる蟲

をさなごは咳をすと目ざめたるこのさ夜なか
に雨ふる音す

夜の雨林のなかに降るきけば心さびしくなり
にけるかも

草蜉蝣

八月三十日淺草觀世音詣

みちのべの白きひかりの燈ともしびに草かげろふは一ひと
つ来て居り

淺草あさくさの日のくれぐれの燈ともしびに青き蟲こそ飛びす
がりけれ

電燈のひかりにむるる細こまか蟲むしは隅田川すみだがはより飛
び來つるなり

電燈の光まばゆき玻璃戸はりどには蚊に似たる蟲む
れて死につつ

四年^{よとせ}まへわれも聞きつつかなしみし八木^{やぎ}節音^{ぶしおん}
頭^{かぶ}すたれ居りたり

眼^{まなこ}とちて吾は乞ひ祈^{いの}むありのままにこの生^{いき}の
身^みをまもらせたまへ

月赤くかたむくを見し夜^{よる}ふけて蟲^{むし}が音^ねしげき
道を來しかば

蟲^{むし}が音^ねはしきりに悲し月よみの光あかあかと
傾^{かたむ}きゆきて

八月三十一日

偶行脚に來れる小國宗碩を伴ひて、本所被服廠跡を弔ふ。

ひとあまたほのほ炎ほに焼やけし跡あとどころに高野たかののやま
の箸しほを賣うる見みゆ

たちのぼる香かのにおにほひを嗅かぎながらここに迫せま
りし火ほ炎ほおもほゆ

渾
沌

折をに觸ふれたる

にも居すりにけむもの
娑婆しやば苦くより彼岸あなをねがふうつしみは山のなか

うそざむく夜よふけゆきてかりがねの鳴けるを
聞けばかなしくもあるか

今しがた空そらたかくして鳴ける雁かりひとつならず
とおもほゆるかも

めざめるてひとりぞおもふいつしかもかりが
ね來鳴くころとなりにし

かりがねは遠くの空を鳴きゆけり夜よふけし家
にかなしむときに

焼あとにほしいままにてしげりにし雑草あらくさもな
べてうらがれにけり

あらはにてうづたかかりし落葉はらふには今朝けさみれ
ば霜しもぞいたく降りつる

いのりさへ今は絶えつつ小夜ふけし暗やみの
中にわれ立てりけり

うつしみは苦しくもあるかあぶりたる魚し
じみと食ひつつおもふ

まどかなるわがをさな兒の眠りさへ顧みずし
て幾日か経たる

百子

朝はやくすでに目ざむるをさなごのこゑを聞
きつつわれ疲れ居り

ふゆの陽は南かたよりにあまづたふその日向
にて百子匍ひ居り

子規忌歌會

十月四日
於大龍寺

おのづから秋は深^{ふか}むとおもふにも寂^{しづ}かなるひ
かり岡を照らせり

みちのくの兄

みちのくのわぎへの里ゆ來^こし兄は父が臨^{いま}終^はの
ことを語りぬ

おもほえばかなしくもあるか熱^なたかく七^な日^ぬふ
して父は死にゆきしとふ

うつし身はかなしけれども皇^{ひめ}孫^{みまご}女^め生^あれましし
けふぞ心なごまむ

火災より一年目

柱時計ここに焼けけむ齒ぐるまの錆び果て居
るを蹴とばしにけり

焼あとよりいづる碁石のころがりも心に沁む
と告げやらましを

いつしかも冬のひかりに萌えいでし細かき草
をここに我が見む

うらがれしむぐらを照らす冬の日の光を見れ
ばもの戀しかり

ひといろに霜がれ立てる雑草のひまに萌えづ
るこの小草はや

雑歌控

一月一日上海歌會

海外にいそしむはらからと相まみえ我が心ふ
 るひたたざらめやも

山口茂吉ぬしの轉居をききて

この男にさきはひ給へこの男蒲田のさきへ移
 り住むとふ

藤なみの花のむらさき咲かんととき君が新室にいむろい
 よよすがしき

昭和元年
大正十五年

山口英吉

山口英吉

山口英吉

昭和元年 (大正十五年)

家常茶飯

くれぐれにわれのいそげる砂利^さみちは三月^{やよひ}に
ちかき雨ふりて居り

おのづからゆらぎつつある紙帳^{かみ}のなかに疲れ
てものをこそおもへ

くろき空^{あき}罎^{びん}をうづたかく積みし小路^{こうぢ}のところ
よりわれ入りて來^きつ

いちじゆくのあらき枝^{えだ}には芽^めぶかねばさへづ
る鳥の濡れたるが見ゆ

味噌^{みそ}しるのなかに卵^{たまご}を煮て食ふは幾^{いく}年^{ねん}ぶりに
食^くふにやあらむ

雪ぐもり

大正十五年三月一日ゆふべ

雪ぐもりひくく暗きにひんがしの空^{そら}ぞはつか
に澄みとほりたる

罪ふかき我にやあらむとおもふなり雪ぐもり
空さむくなりつつ

おもおもとたたなはりにし雪ぐもり雪ははだ
らに降りくるらむか

くもり日の低空のはてに心こほしきあかがね
いろの空はれわたる

寒月集

わがこころいつしか和みあかあかと冴えたる
月ののぼるを見をり

氣づかずに吾は居つるに牡雞はただひとつに
てけふぞ遊べる

あまつ日の無くなることを悲しみて踊りし神代おもほゆるかも

をさなごを遊ばせをればくりやより油いたむる音もこそすれ

ゆふぐれて吾に食はしむと煮し魚の白き目の玉噛みあたりけり

我家やけてより三聯隊の兵營は直ぐまぢかくに見ゆるがごとし

紙帳のなかにこもりてしづかなる息をつかむとわが居たりける

こよひもすでに更けゆくとおもひつつ紙帳なかにわれめざめ居り

齒のいたみおのづからにてしづまりしこのあかつき曉
をわれはねむりぬ

みちのくの湯ゆ花はなを塗ぬりてこよひしもかゆ癢かゆきわが
身をいとほしむなり

みちのくの最も上がみ高たか湯ゆの湯の花をおろそかにせ
じ人ひとのみなさけ

山房の夜中

みちのくに雪ゆき解げのみづのとどろくと告げこし
友を我はおもはむ

われひとり眼まなこみひらく小夜よふけに近くをとほ
る兵の足あしおと

さ夜ふけと春の夜ふけしひもじさに乳のあぶ
らを麵麩にぬりつつ

とりよろふ青野を越えてあゆみつつ神死した
りといひし人はも

赤彦はいまごろ痛みふかからむ赤彦をしまし
ねむらせたまへ

山房漫吟其他

一月十一日、讀新聞 二首

武林文子おもかげに立つごとしニースの濱に
殺されしとふ

こみいりし女をみなにもあるか平凡へいほんにまぐはひをせし女をみな
とおもへど

きさらぎ

ひたさむき大おほつごもりの銀座ぎんざにて獨樂ごまなど賣
るをしまし目守まもりぬ

帽ぼうとりてわれは立ち居り目のまへを大臣おとど加藤
のひつぎ柩ひつぎとほりぬ

うめのはな咲けるを見ればをさな穉なくて梅の實みくひ
しむかしおもほゆ

をさなごの赤羅あかぢひきたる兩頰もろほほを我は見て居り
寒あさけき朝明あさけに

みちのくに大雪おほゆきふりてひとの住む家つぶれぬ
と聞くぞかしこき

すゑ風呂にゆあみしをれば目のまへにきさら
ぎの夜の月かたぶきぬ

くすり湯をたてて浴みつつぬばたまの夜ふけ
ぬればしばし静けし

長塚節第十二回忌

二月七日
於松秀寺

しづかなるみ寺のなかにおもふどちひとつ心
に君を偲しのびつ

をりをりは君よりゆづり受けし書ふみも火事に焼
けたることを思はむ

三月五日 三首

墓原はらの空そらにみなぎり時のまに降りくる雪をあ
はれといはむ

ひさびさに湯屋ゆやへ行きたる歸るさに道のべの
大きな石に氣がつく

けさの朝明あさけふれる泡雪あわゆきことごとく消えぬとい
ひて湯より歸れり

四月五日、書物などの塵を拂ふ。鬼をやらひしは二月三日の寒き
宵なりけむ。その夜島木赤彦君アラギ發行所に熱いでて居たり
き。

行春ゆはるの部屋かたづけてひとり居り追儼つるなの豆を
われはひろひぬ

四月十五日、強風砂塵をあぐ

きぞの夜に叫びもあげず牡雞せんとりは何かの獸けものに殺
されて居り

わがところ安やすくもあらず街まちに來て壁かべぬり居をる
を見て過ぎにけり

五月五日、澄江堂のあるじより「かげろふや棟も落ちたる茅の屋
根」といふ消息たまはりければ

湯のなかに青く浮かししあやめぐさ身に沁む
ときに春くれむとす

ふけわたる夜よるといへども目をあきて瘦せせ居をる
君し我は會ひたし

赤彦忌

五月九日於
犬山寂光院

寄詠

わが友は信濃の國にみまかりてひたすら寂し
この逝春を

六月二十日

竹煮草ほしいままにも延びたりと見てをると
きは心安けし

みちのくの便きたりて大き螢とびそめたりと
いふがかなしさ

あかねさす晝野の草にこもりたる螢か飛ばむ
きよき夜空は

左千夫第十四回忌

六月二十七日
於龜戸普門院

久方の空そらよく晴れしけふの日や師のみ墓かぶべに
吾等われら來りし

第三回安居會

自八月二日至八月六日
於武州三峯山上

山のうへのあかつきにして見おろせりこの深ふか
谿たにをみづ流るらむ

赤彦追悼歌會

十月十六日於上
諏訪町法光寺

うつし身と生きのこりつつ春山のこの寂しき
に堪へざらめやも

麥の秋

ついでありてわれ郊外かうぐわいに来てみれば麥むぎの畑はたけは
いろづきにけり

目のまへの雑草あらくさなびき空國むなくににももの充みつるなし
て雨ぞ降りゐる

眞夏まなつの來むかふときに青き草のしげりがなか
に立ちもとほろふ

むなしき空そらにくれなるに立ちのぼる火炎ほのほのご
とくわれ生きむとす

ひとりゐて今夜こよひは何もせざりけり友死ともじにしよ
り寂さびしくもあるか

三峯山上

いつしかもあかあかとして月てれる檜原の山
に夜の鳥ぞ啼く

二つ居りて啼くこゑきけば相呼ばふ鳥が音か
なし山の月夜に

うつそみの悲しむごとし月あかき山の上にし
てひびかふ鳥よ

月よみの光くまなき山中に佛法僧といふ鳥啼
けり

山のうへに光あまねく月照りて眞木の木立に
きほひ啼く鳥

上野國に入る

雲うごく檜原ひはらの山をくだり來て繭煮るにほひ
身にもこそ染め

あまつ日の光はつよし米負こめおひて山に入るひと
ここにいこひぬ

上野かみつけのくにに來りてあまつ日の傾かたむくかたの山
に入りゆく

ひぐらしのこゑ透りつつあかつきの青き山峽やまがひ
ゐる雲もなし

ひさかたの空すみゆきてあかあかとかの山の
べに月おつるべし

歩道の氷

齒科醫より歸りきたれる道すがらわれの額に
汗いでて居り

うつせみの生のまにまにおとろへし齒を抜き
しかば吾はさびしる

むしばみてわが齒なやみし日ごろより日に日
に秋は深くなりつも

日の光きびしかりしをおもふとき今日このご
ろは涼しくなりぬ

口なかににぶき痛みをおぼえつつ青山どほり
横ざるわれは

秋に入りし歩道あゆみて我は見たり四角の氷
を並めて挽けるを

家ごもり久々にして街ゆけり青山どほりの祭
すぎつつ

稚らのはしやぎ通れるあとどころ或時はここ
ろ平かならず

金線草

秋づきて心しづけし町なかの家に氷を挽きを
る見れば

おのづから生ひしげりたる帚ぐさ皆かたむき
ぬあらしのあとに

野の分わきすぎて寂さびたる庭に薄すすきの穂ほうすくれなる
にいでそめしころ

女めの童わらはあつぶすま著てねむりたりはや宵よひ々は
寒さくなりつつ

しげりにし莠はぐさ草くさを見ればあはれなるひと
になりてうら枯かれむとす

めざめあてわれはおもへり雑あらくさ草くさの實みはこぼる
らむいまの夜よごるに

秋あきふけし日のにほひだつ草くさなかに金線みづひきぐさ草くさもう
らさびにけり

月つきかげのしづみゆくころ置おきそふる露つゆひゆら
むかこの石いしのうへ

誼訪

十一月九日高木村に亡友の墓を弔ふ。

あかつきのいまだをぐらきころよりぞ國のま
ほらに砲^{はら}を打ちつる

道のべに黄いろになりしくわりんの實^み棄てて
あるさへこよなく寂し

にはひけむ紅葉^{もみぢ}もすがれはてにけり友をうづ
めし信濃のやまに

いのちありて我は老いつつ居りぬとも君のな
きがらここにあるべし